

障害や生きづらさをかかえた本人と親の

5080問題×認知症

日本も抱える問題と真正面から向き合った

オランダの映画から考える

■「EU フィルムデーズ 2023」映画祭

<https://eufilmdays.jp/>



コロナ禍の制限が解除されて、対面の
国際映画祭が
戻ってきた。

6月から日本国内4都市で巡回されて
いるこの映画祭は、欧州（EU）連合加
盟国の在日大使館と文化機関が協力
して自国作品を紹介し、一挙に上映す
る企画だ。

日本にいながらにして、ヨーロッパのさまざまな国の人と文化にスクリーンを通して触れる絶好の機会だった

ウクライナが EU 加盟国候補となったため、同国の映画『ヴァディムの旅』も特別上映された。

■ オランダの大ヒット・ドキュメンタリー

オランダから出品されたのは、ケース・モツマ (57) という自閉症のあるオランダ人男性とその家族の関係を見つめたドキュメンタリー映画だ。

オランダ国内で300万人を動員し、最優秀ドキュメンタリー賞を獲ったという第一作目、『ケースのためにできること』(2014)と、今年公開された注目の続編、『ケースがはばたく日』(2023)の2本セットで上映される。

(主音声はオランダ語、英語と日本語の字幕付き。)

第三作目の撮影も、来日する数週間前に終わり、来年に公開される予定。

この上映に合わせて来日していた、映画の主人公で自閉症当事者のケース・モツマさんと、映画監督のモニーク・ノルテさんに、オランダ大使館で話を聞く機会を得た。

その時の会話を交えながら作品と人物を紹介してみたい。



ケース・モツマ (Kees Momma) :

アーティスト、自閉症当事者

幼少期に診断を受け、自閉症の特徴と向き合いながら、
アーティストとして活動している。



モニーク・ノルテ (Monique Nolte) :

映画監督

オランダなどで数多くのドキュメンタリー作品を手がける。

ケース関連作品の他に「Een Bitterzoete Verleiding」

(2008 年)や「Nikki」(2022 年)など。

(撮影:馬籠久美子)

■ 短編『トレインマン』（1988）



32歳だった電車オタクのケースの

“鉄ちゃん”ぶりをあますところなく紹介

した初作品。タイトル名は、ダスティン・

ホフマンとトム・クルーズが共演した同

年公開の『トレインマン』をもじって付けた。

（55分）

©Doclines

<https://www.youtube.com/playlist?app=desktop&list=PL2Y1bXDduUCgUQBSEbbtUaqmOPARCD2thB>

当事者と監督の出会い

すべての始まりは、この短編映画だった。

若手監督として制作するチャンスを得たモニークは、ケースの存在を知り、撮影させてく

れるように依頼。カメラを回しはじめると、映し出されたのは、これぞ正統派鉄道オタク

の彼が喜々として電車を見る姿だった。

当時は予想しなかったそうだが、ケースとモニークの友達のような関係は撮影後も続き、

年一、二回のペースで会い、ケースのPC購入後はメールでもやりとりするようになる。

その中でケースは、特定の物にひどく執着してしまうことや、いつも強迫観念があること、うつになりがちであることなどを伝えた。

とりわけ、彼は両親がやがて老いて亡くなることが恐くてたまらない。

その怖れは人生の先行き不安とも相まって、年ごとに深まっていった。

■ 映画・第一作目『ケースのためにできること』(2014)



自閉症のケースは 49 歳。
彼の将来を案じる 80 歳と 83 歳
の両親が 息子のために献身する
姿をモニック・ノルテ監督が追う。
(87分)

【HP より転載】

<https://eufilmdays.jp/lineup/entry-2300.html>

■ 自立支援と共依存

短編から 10 年後の 2007 年、本格的なドキュメンタリー制作の機運が高まった。

ケースの将来を案じた父親が、自閉症の人のための自立支援型ホームを建てる計画を立てたのだ。しかるべき土地が得られれば、ゾーニング(区画整理)をして、自閉症の人が住む一戸建てを 10 戸ほど建ててひとつのユニットとし、成功したらそれをモデルと

してもっと増やす、という。

しかし最後は母親のヘンリエッタが断固反対して、計画は頓挫してしまう。

その展開からあぶり出されるのは、障害のある息子とその母親の、止むに止まれぬ、共依存関係。映画終盤で、母親はこう言い放つ。

「私が死ぬとき、この息子は安楽死させます」。この発言は観る者に衝撃を与えた。

■ 2E（二重特殊例）のアーティスト

ケースは対人困難、知覚・感覚過敏、多動があり、潔癖症で、予定の変更などの融通が利かない。ストレスに対しても脆弱だ。また、絵を描くことなどの秀でた部分と、苦手な部分のギャップが大きい、いわゆる2E（トゥー・イー：Twice Exceptional=二重特殊例）タイプである。

ケースの両親は、彼の自閉的特徴と稀有な才能を幼少期に見抜いたが、医師からは「精神薄弱児」と診断された。当時は支援も何もなかったため、親としてすべてを引き受ける覚悟を決め、できる限りの環境を整えた。現在のオランダでは特別支援教育やソーシャルスキルトレーニングが充実しているそうだが、それがない時期に育たねばならなかった世代である。

義務教育を経て公文書館で働いたこともあったが、その後は芸術的に優れた部分を活かして、自らアーティストと名乗って活動してきた。学校に10年通ったそうだが、その

日々について尋ねてみると、「それは、あまりに辛いので、一切お話しできません」。



自閉症の人のための小規模・居住型・介護施設の建設資金

として自分の作品をオークションにかけた。

オランダの障害者支援団体 HandicapNL の HP より

<https://handicap.nl/blog/kees-momma-veilt-tekeningen-voor-handicapnl/>

■ 映画・第二作目 『ケースがはばたく日』(2023)



『ケースのためにできること』

の続編。親離れし自立してい

く過程を追ったドキュメンタリ

ー。両親にとっては常にケー

スが生活の中心にあった。二

人三脚で暮らしてきた母子は、互いの存在無しで生きていけるだろうか。

(105分)【HP より転載】

<https://eufilmdays.jp/lineup/entry-2249.html>

■内なる静寂、外への爆発、そして地球「沸騰化」

50歳を過ぎたケースは、裕福で忍耐強い両親と同居している。

隣接する、彼の自室である“離れ”と母屋（両親の家）を行ったり来たりして過ごす。

“離れ”には、ジオラマのある鉄道の部屋、創作をするアトリエの部屋があり、独自に調整された過ごしやすい家庭環境に守られている。

それでも彼にとって耐え難いことが起きると、一日に何度も感情が爆発してしまう。

誰かが鼻をすすった、外を走る車がクラクションを鳴らした、監督のスカートが短すぎる、など。

彼はその場にいる人のことを顧みず、一方的にブチキレて、周りを当惑させる。

一番近くにいる母親は彼の怒りを浴びやすい。もうあきらめたかのように無表情で、彼の嵐が過ぎ去るのをただ待っているようだ。

独立した二人の兄たちは、「本人の言いなりになりすぎて甘やかした、家庭以上の環境が外で得られなくなったのは不幸だ、」見ている。

しかし当のケースには別のリアリティがある。

「私の内側には、それは完璧な静寂があるのです。みごとに静まり返っている状態なのですが、ちょっとでも外部から刺激を受けると、一瞬ですべて崩れ落ちて、もう元には戻

りません。」

そんな彼の最大の恐怖は、自分の思い通りにならない天気という怪物である。

天気の変化→地球温暖化→生命の危機→人類滅亡、と不安は暴走する。

両親は、毎朝テレビでニュースを見ながら、その日の予報を本人にどう伝えるか、工夫しなければならない。

ところで、天気・気候の変化に敏感な発達障害当事者は他にもいる。

その代表が、スウェーデンの環境活動家のグレタ・トゥーンベリ(20)だ。

自ら ASD(自閉症スペクトラム)であることを公表し、地球温暖化をくい止めるために活動している。彼女は自身の「アスペルガー症候群」(とかつて呼ばれていた特徴)を病気ではなく、「スーパー・パワー」であると捉えなおしているという。天気に敏感であるという特徴をもって、どのように社会に関わることができるのか、果てしなく大きな可能性を感じた。

■ 5080問題×認知症

障害や生きづらさをかかえる本人と親の関係、「親なきあとの人生」は日本でも問題だ。

本人50才・親80才と見立てて、「5080問題」とも呼ばれるが、この映画はまさにそのテーマに真正面から向き合う。

父親は息子の行く末を案じ、自立支援型の住まいを実現させようとする。

しかし母親はそのことを理解しつつも我が子を手放せない。

オランダで合法化された安楽死という言葉まで飛び出すが、当然ながら適用範囲外だ。

当のケース本人は、母親のヘンリエッタを愛情深い必要不可欠な存在と見なし、父親には距離を置いている。

だが、この母と息子の共依存関係は、母親に認知症の症状が出ることで変化せざるを得なくなっていく。

興味深いのは監督のまなざしである。とことん息子に尽くす母親に対して、同情するよりも、「支配的」「常にコントロールしたがつている」と、かなり批判的だ。

オランダの感覚ではそうなのだろうか。

同時に、自閉症の息子との関係では相互的な双方向の愛を得られない「悲劇の人」としても母親を位置づけている。

「私が病気になって、息子に必要なことをやってやれなくなったら、息子はもう会いに来なくなるでしょう」と、監督にくり返し語ったというエピソードを紹介している。

来年公開予定の次作は、共依存関係からの脱却がテーマだ。

今やちょっとした有名人になったケースに、オランダ国内のメディアは、「果たして、親元から離れて自立できるのか、乞うご期待!」と注目している。

■ 日本が大好きな理由

じつはケースは日本語が少し話せる。驚いたことに、中級程度の漢字も、絵筆を使って、おそろしくきれいに書くことができるのだ。兄の一人が日本で働いていたことがあり、両親と一緒に日本を訪れて以来、独学で勉強してきた。日本語で友達を作りたいというよりも、とにかく漢字に魅了されてしまい、日々漢字練習をしているという。

思えば、日本とオランダには、江戸時代の出島に象徴される特殊な交流の歴史がある。

「どうして日本がそんなに好きなのですか?」、と聞いてみた。

するとシンプルかつはっきりとした英語で答えてくれた。

「日本の人は、静かで、行儀がいいです。それに鼻をすすったり、鳴らしたりしませんから。

人の話を聞きながら、アハーンとか、言わないでしょう?」

やっぱりそこなのか。ケースは生真面目さゆえに、不思議なおかしみのある人だ。

オランダ語で話す時は、今は使われない古風な言葉を使ってキレイにするので、おもしろ

がられているそうだが、うまく翻訳できないのがとても残念だという。

来年の再来日が、今から待ち遠しい。

写真： ケースの手書きによる超大作、『京都の見物・出掛けましょう』（2008）を特別に披露してくれた。巻物を解くと、オランダ大使館の客間の端から端まで伸びた。



（文と写真：馬籠久美子）

※ この原稿を書くにあたり、オランダ大使館の方々と、大変お世話になりました。感謝申し上げます